

# 札幌市勤務医協議会ニュース

発行 札幌市勤務医協議会  
札幌市中央区大通西 19 丁目  
札幌市医師会館内

## 令和元年度全国医師会 勤務医部会連絡協議会参加報告

### 令和元年度全国医師会 勤務医部会連絡協議会参加報告 メインテーマ：待ったなしの働き方改革 ～勤務医の立場から～

会長 成田 吉明

本年度の全国医師会勤務医部会の連絡協議会が、去る10月26日山形市のホテルメトロポリタン山形で開かれました。

特別講演Ⅰとして日本医師会の今村聡副会長が「日本医師会の医療政策」と題して、医師の働き方改革の議論においては「地域医療の継続性」と「医師の健康への配慮」のバランスが取れていることが重要で、医療現場を熟知した医師自らが改革を主導していくことが重要と述べられました。

特別講演Ⅱでは国立がん研究センター名誉総長・山形大学医学部参与の嘉山孝正先生が「複眼的にものを見る」と題して、ある制度の良し悪しなどは単眼的な視点のみでは判断を誤ることを、様々な例を挙げて述べられました。

ランチョンセミナーでは慶應義塾大学先端生命科学研究所長・環境情報学部教授の富田勝先生が「慶應鶴岡発バイオテクノロジーが創る健康長寿社会」と題して、代謝産物による生体の評価手法を用いて癌のリスクや鬱病の重症度を測定することが可能となり、すでに臨床応用が始まっていること、NASA も US Army も断念した“蜘蛛の糸”をベースにした研究から強靱な新繊維素材の開発に至ったこと、世界的に評価されるベンチャー企業が続々と誕生していることなど、地方都市でも東京に引けをとらない活動ができることを熱く語られました。

シンポジウムⅠ「勤務医の働き方改革」では、山形県医師会から「山形県における勤務環境に関する調査報告」、厚労省から「医師の働き方改革の方向性」、山

形県・酒田市病院機構から「病院運営と働き方改革～現場の懸念」、日赤医療センター産婦人科から「チームで支え合う働き方を目指して～誰もが活躍できるために～」のタイトルで発表がありましたが、それぞれの立場や施設の規模が違うだけに噛み合った議論は得られませんでした。

シンポジウムⅡ「生涯現役～勤務医定年後の明るい未来～」では、山形県内の病院勤務医のうち7割が定年後も同じ病院で勤務を続けたいという調査報告と様々な実例が示されましたが、特に興味深かったのは山形大学の「リフレッシュ医学教育について」の発表でした。非臨床医や定年後の医師を短期間に再教育し、自信を持って臨床現場に戻っていただくためのプログラムで、昨今注目を集めている病院総合医育成と通ずる話だと思われました。

“やまがた宣言”を採択して盛会裡に閉会した後は、本場の「花笠踊り」と日本酒「十四代」を心ゆくまで堪能しました。

翌日曜日には、一昨年度の北海道から始まり3回目となった勤務医交流会が開催されました。「専門医取得後のサブスペシャル専門医取得や学位取得」、「現在勤務中の病院で勤務医をいつまで続けたいか」、「時間外勤務上限 年 1860 時間をどう考えるか」をテーマにワールドカフェ方式でディスカッションと発表があり、山形大学医学部の学生から定年後の医師まで幅広い年代間の交流がなされ、面白い試みだと感じました。

(手稲溪仁会病院)



## やまがた宣言

2025年には団塊の世代が75歳以上となり、国民の医療需要は変動し続ける。医師需給分科会では2028年頃にマクロで医師需給は均衡すると推計し、地域枠の効果等を踏まえ2036年を医師偏在是正の目標年としている。しかしながら、地域間格差や診療科間偏在の是正に関しては、その効果が確実とは言い難い。病院による時間外勤務時間の上限には考慮すべきであるものの、勤務する病院の役割や地域特性、また医師のキャリア等に配慮した勤務時間とすべきと思われる。

国民の高齢化率の上昇は、同時に高齢医師の増加も意味するが、一方で勤務医の多くは定年後も診療に携わることを望んでいる。山形県では、山形大学、山形県、山形県医師会および県内の病院で構成された協議会が地域の実情にあった医師の配置に努め、成果を上げている。地域医療構想により地域での病院の役割が明確にされつつある現在、定年後の医師の就業先について検討の場となりうることを願い、次のとおり宣言する。

- 一．必要医師数のみならず、2036年には医師の地域偏在と診療科偏在問題も是正できるよう求める。
- 一．医師の働き方については、勤務環境により時間外労働に上限が設定されるが、その他の要因も含めて継続して議論する。
- 一．経験を積んだ定年後の医師が活躍できる医療環境の構築を求める。

令和元年10月26日

全国医師会勤務医部会連絡協議会・山形県

所

感

所 感

幹事 鷲見 佳 泰

皆様、新年明けましておめでとうございます。平成から令和に変わり初めての年明けを迎えましたが、いかがお過ごしでしょうか。昨年（平成31年・令和元年）は、東京オリンピック開催の前年に相応しく、ラグビーワールドカップがアジアで初めて日本で開催され、日本チームが予選を突破。初めて決勝トーナメントに進出し、日本中を沸かせました。同じく、テニスの大坂なおみ選手の全豪オープン優勝や、ゴルフの

渋野日向子選手の、日本勢42年ぶりのメジャー大会（全英女子オープン）優勝など、話題の多い年でした。しかし、台風15号・19号が上陸し、日本中に多大な被害をもたらしたり、消費税が8%から10%へ引き上げられ、今後の景気の先行きが不透明になったり、など暗いニュースも多い年でした。そんな中、昨年のあるアンケート調査「2019年に印象に残った政治・経済・社会関連の出来事」で、1位に挙げられていたのが、高齢者ドライバーによる危険運転事故が多発した、というものでした。4月に発生した池袋の母子死亡事故は、大変いたましく、運転者への厳罰を望む署名が多数寄せられました。

高齢者ドライバーの事故多発を受けて2017年の道路交通法改正により認知症対策が強化されましたが、これは、75歳以上の高齢運転者の死亡事故に関しての調査にて、運転者の認知機能検査の結果、「認知症のおそれ」が7.2%、「認知機能低下のおそれ」が42.2%と、認知機能の低下が、高齢者の事故に何らかの影響を与えている可能性が高い結果が出たことを受けてのものでした。75歳以上の免許更新時に行われる認知機能検査の結果、「認知症のおそれあり」と判定されると、医師の診断を受ける必要があり、実際の勤務するような認知症診断に関わる医療機関を受診される方が増えていますし、また、国の「運転に自信がない・家族から心配と言われた」方に対しての、運転免許の自主返納を促進する取り組みもあって、以前から通院されていた方から、「免許を返納したよ」などと聞かされることも目立ってきました。しかし、運転をやめることにより、日常生活に支障をきたしても問題ですし、外出を控える事による身体能力・認知機能への影響はないか注意して見守る必要があるでしょう。

統計をみると、死亡交通事故の発生は、年々減少しており、高齢運転者の事故の件数も減少傾向にあるものの、高齢者人口自体が増加しているため、全体に占める割合は上昇傾向にあります。また、車を運転する高齢者も増えており、内閣府の調査では、普段外出時に自分で車を運転する高齢者の割合は、2000年では37.0%でしたが、2018年には56.6%に達したそうです。これには高齢者が元気なこと、生活習慣の変化、そして何より車の運転が以前より容易になっていることも関係しているでしょう。また、北海道の場合には、

JR 路線の減少や、公共交通機関が不十分でもあり、運転しないことには生活できないことも理由となっているでしょう。

高齢者に限らず、不幸な事故は減らしていく必要があります。今年度は、このような事が、印象に残るような出来事にならないように、我々も医療者としての立場で出来ることから取り組んでいかなければならないのではないのでしょうか。ちなみに、私の母は 80 歳を過ぎましたが、膝痛で歩けないと言いながら、車に乗ってあちこちと出かけています。免許の自主返納など、全く考えていないようです。

(中村記念南病院)



## 「行動経済学」って何？

### 幹事 宮本 憲行

昨年、内科の学術講演会に何度か参加したのですが、立て続けに「行動経済学」のミニレクチャーを受ける機会がありました。演者は循環器の先生と糖尿病の先生で、ご略歴には経済学部卒の記載はありませんでした。私には未知の領域のお話で「プロスペクト理論」の具体例で始まった聴衆参加型の講演会になりました。プロスペクト理論は「人の意思決定は、さまざまな心理的要因によって左右される。」ということの研究した理論のようで、基本的に人は損をするのが嫌いなので、リスクのある投資をするより確実な利益を好む人が多いというような現象を説明するのに使われます。プロスペクト理論は 1979 年、アメリカのダニエル・カーネマンらによって発表され、このダニエル・カーネマンは 2002 年にノーベル経済学賞を受賞しています。さらに行動経済学の領域からは 2013 年にエール大のロバート・シラー教授、2017 年にはシカゴ大学のリチャード・セイラー教授がノーベル賞を受賞されていますので、経済学のなかでもとても major な領域のようです。

行動経済学は人間の意思決定の癖をいくつかの観点で整理されたもので、先述した「プロスペクト理論」、時間割引率の特性である「現在バイアス」、他人の効用や行動に影響を受ける「社会的選好」、合理的推論とは異なる系統的な直観的な意思決定である「ヒューリスティックス」の 4 つからなるそうです(行動経済学の使い方 大竹文雄 著 から引用)。

講演会では「現状維持バイアス」と「現在志向バイアス」から clinical inertia (治療目標が達成されていないのに、治療が適切に強化されていない状態) が起こりやすくなると説明されていました。現状維持バイアスは大きな変化や未知なるものを避け、現状を維持したくなるという心理作用で、現在志向バイアスは未来の利益よりも目先の利益を優先してしまう心理とされています。例えば、ガイドラインで血圧は 130/80 mmHg 未満が推奨されているけど、過降圧が起きたらどうしよう? とか、HbA1c 6.5% を目指して低血糖が起きたら困るよねとかの心理が働き、結果として clinical inertia が起こっていくことになるようです。また患者側からも、血圧はちょっと高くても、HbA1c が高くても、症状がないから大丈夫というような正しくない認識のもとで、薬が増えたら医療費がまた増えるよねとか、副作用が出たら困るよねとか良くなるメリットより悪いことが起こるデメリットを強く認識する心理が根底にあるので、相乗効果をもって clinical inertia が助長されていくこともあるようです。このような背景がある臨床現場で、適正な診療をするためにはこの仕組みを理解することが必要だというお話のように理解しました。また、医療現場では、医師が合理的と考えて説明しているのにもかかわらず、患者は「医師の説明がわかりにくく、意思決定がしにくいと感じている」ことが時々あるように思えます。異なる心理状態の人々のコミュニケーションの中で、おなじ情報でも提供する側と受け取る側では、かなりの GAP が存在することを認識しなければいけないようです。それを解決する一つの方法論として行動経済学の活用は有用なんでしょう。しかしながら今の私には、病院収支のバランスシートがすらすら読めるくらいの現実的な経済学の勉強の方が優先順位を持って必要なようです。経営の会議には出席したくないなど、現実逃避バイアスに苛まれています。

(N T T 東日本札幌病院)

## ご 案 内

### 札幌市病院協議会・札幌市勤務医協議会 合同講演会の開催について

例年開催しております『札幌市病院協議会・札幌市勤務医協議会合同講演会』を下記のとおり開催いたします。

多数のご参加をお持ちしております。

#### 記

- ・ 日 時：令和2年2月18日（火） 午後6時30分
- ・ 場 所：札幌市医師会館 5階ホール（札幌市中央区大通西19丁目）
- ・ 演 題：『レーザーによるガンの診断と治療－悪性脳腫瘍を中心に－』
- ・ 講 師：柏葉脳神経外科病院 名誉理事長  
札幌市病院協議会 参与  
金子 貞男 先生
- ・ 主 催：札幌市病院協議会・札幌市勤務医協議会・札幌市医師会

### 「札幌市勤務医協議会ニュース」の閲覧について

「札幌市勤務医協議会ニュース」を札幌市病院協議会のホームページに掲載しております。バックナンバーも閲覧できますので、是非ご覧ください。

札幌市病院協議会ホームページ URL  
<https://www.sapporo-byoinkyō.jp/>

